

「Y日記」から見たサンパウロ州の日系農業 小生産者の生産と生活(1)プルデンテ市近傍 の日系農業小生産者の2次的集団地「ミネの ムラ」の社会経済的性格

西川, 大二郎

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 社会科学編 / 法政大学教養部紀要. 社会科学編

(巻 / Volume)

79

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

21

(発行年 / Year)

1991-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004558>

「Y日記」から見たサンパウロ州の日系農業 小生産者の生産と生活（1）

—ブルデンテ市近傍の日系農業小生産者の
二次的集団地「ミネのムラ」の社会経済的性格—

西 川 大二郎

目 次

- I. まえがき—問題の所在—
 - II. 「ミネのムラ」の経済的性格の概略
 - (1) 日系農業小生産者集団地の形成
 - (2) 「ムラ」の人口構成
 - (3) 「ムラ」の構成員の土地所有規模と農業経営類型
 - III. 「Y日記」から見た日系農業小生産者の生産と生活の様態
 - (1) Y氏の生活史
 - (2) 「Y日記」の小さな解説
 - (3) 「Y日記」記入費目の吟味
 - (4) 「Y日記」の分析のための費目の分類
- (以下次号)

I. まえがき—問題の所在—

この論稿は、すでに発表した「サンパウロ州内陸フロンティアにおける農業小生産者の成立過程¹⁾」の続編である。前稿においては、サンパウロ州におけるブルデンテ市周辺部の日系のベケーナ・プロプリエダージ（独立農業小生産者）の二次的集団地を対象とし、その構成員のトレイルを追って、サンパウロ州における日系のベケーナ・プロプリエダージの二次的集団地を成立させたブラジルの歴史的、経済的諸条件の解明に焦点をあてた。本稿では、その結果成立したベケーナ・プロプリエダージの二次的集団地の社会経済的性格の解明を問題とする。

ところで、上述の二次的集団地には「ミネのムラ」という仮名を与えた。

「ミネ」は、この集団地が高原上の分水嶺に立地した集落であることに由来した仮名であることは、既に述べた。さらに、このブラジルにおける日系農業者の集団地を「ムラ」と片仮名書きしたのは、いくぶんの思いがあってのことである。日本においては、日本の村落社会を農村共同体的性格を重視して表現する場合、また、自然村的性格を行政村と区別して表現しようとする時、しばしば「むら」と平仮名書きする。この日系農業者の集団地は、何はともあれ、ブラジルという西欧的ホスト社会の中に成立したものであり、このホスト社会との関係で、如何なる性格を付与されることになったかという問題を立ててみると、単なる農業者集団地、農村集落というよりは、「むら」とも異なった「ムラ」という表現を用いたくなったのである。

この集団地は、行政的には二つのムニシピオ（郡）にまたがっている。また、ムニシピオによって完結したまとまりを持つものではない。それにもかかわらず、集団としての結合組織と、機能を持っている。それは、多分に日系人という等質性によってもたらされたものであることは否めないことである。このことを以て、よく、日本の「むら」の再生産という。しかし、ブラジルにおける農村の日系人集団地が、果たしてクロンの如く日本のむらと瓜二つのむらとして移植されたものなのであろうか。その問題点を明らかにすることが、本稿の主要な目的である。

上記の問題点を解明するための資料は、1960年に行った現地調査で得られたものである。蒐集された資料は、もっぱら「ムラ」の構成員のほぼ全員とのインタビューによるものである。その中で、「ムラ」の構成員の一人であるY氏から、第二次世界大戦前からほぼ20年間にわたって克明に記録された日記一以後「Y日記」と呼ぶ一提供を受けた。当時、この日記の資料としての重要さは、十分に認めていたが、それを生かすことができなかったのは、筆者自身が、この資料を有効に生かすだけの力を持っていなかったためであった。それと同時に、この資料が生々の記録であり、当時、生のまま即時に発表することが憚られたことにもよる。提供を受けてから、30年の時間が経過した今日、この資料を利用することができるようになったのは、一つには、30年の時間によって、この資料が筆者にとって客観化された歴史的資料となったことである。それと同時に、筆者にもどうやら使用可能になったワープロとパソコンーパソコンの使用については高橋浩二氏の助力によるところが極めて大きい一の出現によって、この膨大な生の資料を整理、加工することができたことによる。

本論の解明に当たっては、この「Y日記」から得られた資料を中心に据えて

いる。

それにしても、30年間この資料を生かすことができなかつたのは、その責任は、もっぱら筆者個人にある。今日、論稿の初めにあたって、まず、資料の提供者であるY氏の御好意に対してお詫びするとともに、深甚の謝意を表したい。

ところで、ブラジルにおいては、1923年に、いわゆる「第一次排日問題」が起こり、それが当時の日本移民制限論にまで発展した。その論拠として、「①日本移民は伯国の基本人種型統一の見地より不可なること。②日本移民は伯国人の言語、風俗および習慣と著しく異なりたるものを有し、同化性に乏しきこと。③かかる民族をして国内随所に集団地を形成せしむるは、伯国の将来に禍根を醸すこと。④軍国主義なること。」の4つが挙げられた。この時期は、日本移民が「国策移民」としての性格を強め出し、日本移民の集団化が進みだした1924年頃に対応するものであった。また、1928年からは、日本の国策移民会社が土地を購入して、直接日本からの移民を集団入植させ、日本のむらの分村を建設するかのとき方法が採られた時でもあった。現実には、この「分村計画」的植民開拓方式は、1934年以後、満州で実現されたことは良く知られている。そして、第二次世界大戦後、ブラジルの日系人の間で「勝組・負け組」問題が発生した時、再び日本人不同化論、日本移民排斥論が台頭した。

このような、異人種、異民族排斥問題の発生は、往々にして異人種、異民族に対する無知と偏見に基づくものであるが、それが社会的風潮になるのは、たいてい政治の場に置かれた場合である。ここでは、一応、政治の問題を別にするが、ブラジル社会におけるマイノリティーとしての日本移民のホスト社会への同化の問題は、ブラジルの社会形成に関わる問題として採り上げなければならないことであろう。

ところで、同化の問題は、個人レベルと集団レベルのものが考えられる。ここでは、ブラジルの社会形成に関わる問題として同化を採り上げるのであるから、個人レベルの同化過程よりも、集団としての同化過程を問題にしなければならない。

社会集団を対象にして同化を取り扱う場合、共同体的性格の強い農村と、一応個人の自由が容認されて「自由の風が吹く」都市とでは、同化の過程や結果が異なるのではないかと考える。その視点からすると、ここで対象にしている「ミネのムラ」に形成されたの特性は、日系人集団の特性なのか、農業小生産者集団の特性なのかという問題が立ち現れるであろう。

以上の諸点を、「ミネのムラ」を対象にして、「Y日記」を大きな拠り所にして、少しでも明らかにしようとするのが、本論稿の目的である。

- 1) 西川大二郎「サンパウロ州内陸フロンティアにおける農業小生産者の成立過程—ブルデンテ市周辺部の『ムラ』を例にとって」『法政大学第一教養部紀要』第75号、1990年。

Ⅱ. 「ミネのムラ」の経済的性格の概略

(1) 日系農業小生産者集団地の形成

日系農業小生産者集団地である「ミネのムラ」の形成過程については既に述べた¹⁾。

そこで、ブラジルにおける日系農業小生産者の成立をもたらした契機を、本論を進めるに当たって必要な要点だけをここに繰り返しておく。

まず、経済的には、ブラジルにおける農業小生産者の成立は、大土地所有の崩壊によってもたらされたものである。この崩壊期には、広大な未開の開拓前線と比較的自由な農業階梯が存在し、農業者は、空間的には相対的低地代、高豊度の土地を求めて移動し、かつ比較的高価格の生産物を選びながら、この農業階梯を上ることができた。この大きな枠組みの中で、新開地の相対的不足から、徐々に、移動型借地農業から定着型自作農業に収斂するものが現れた。その結果の一つが、独立農業小生産者の二次的集団地「ミネのムラ」といえる。しかし、このような独立農業小生産者の集団化は、単に経済的要因だけで説明できるものであろうか。例えば、この集団地の構成員からの面談、聞き取りでは、非常に多くのものが、この地に定着する気になった理由として、子供の教育、とりわけ日本語教育問題をあげている。したがって、定着集団化するため、定着型自作農業に収斂したともいえるからである。

(2) 「ムラ」の人口構成

この集団地の戸数は、1960年段階で、約50戸、人口約300人であった。そのほとんどは農業者で、その他は、仲買兼商店経営者1、日本人学校教員1に過ぎない。一世の数は87人で、全体に対する割合は29パーセント、二世の数は215人で、全体に対する割合は71パーセントである。数の上では、一世は少なく、二世は圧倒的に多い。しかし、一世の世帯主が一定の年齢に達して家族と共にこの地に入植し、二世人口の増加は、その後のことであり、家族の実権は、ひいては集団の実権は一世にある。

(3) 「ムラ」の構成員の土地所有規模と農業経営類型

「ミネのムラ」の構成員の農地所有面積は、第1表のとおりである。(第1表)

最高は37アルケイレ、0は、借地または賃労働者と考えて良い。ミリエによれば¹⁾、ベケーナ・プロプリエダジの土地経営規模は1-25アルケイレで、上限は、25アルケイレであるから、その上限を超えたものは、2世帯に過ぎない。また、CIDA の分類で²⁾、ベケーナ・プロプリエダジにはほぼ該当する family size farms の平均土地経営規模は、17.2ヘクタール(約7アルケイレ)であるから、この集団地の農業経営体は、まさにベケーナプロプリエダジに該当するものと考えることができる。

農業経営類型は、そのほとんどが、AB型(アmendoin=落花生とポタター=ジャガイモとの組み合わせ)に収斂していることがわかる。(第1表)

無肥料地力奪型の綿作は、より外延部に広がり、綿にアmendoinを組み合わせたAA型は、比較的土壌経営規模の大きい上層3世帯を残すだけで、近郊型の養鶏経営1を別にすると他はすべてAB型またはab型となった。このAB型営農方式は、ポタター・セッカ(2・3月に播種し、6・7月に収穫する)とアmendoin・アグア(8・9月に播種し、1月に収穫する)とを組み合わせたものと、アmendoin・セッカ(1・2月に播種し、7月に収穫する)とポタター・アグア(7・8月に播種し、11・12月に収穫する)とを組み合わせたものがある。ポタターは、もともと近郊型の作物であるが、鉄道ばかりでなく、戦後トラック輸送の発達で、近郊ものとの収穫期の差を有利に働かせて、市場であるサンパウロ市から数百キロメートル離れたこの土地での栽培を可能にさせたものである。アmendoinは、第二次世界大戦中の戦時経済下で、1939年頃からの綿花の国際市場の悪化から、綿作地域であったこの地域に進出した綿花の加工資本が、アmendoin油の加工資本に転化し、その傘下のもとに一定の市場性を有している。ポタターは、もともと大量の肥料を必要とするものであり、これと組み合わせることによって、残留肥料によるアmendoinの生産性の向上がみられた。こうして、この2作物の組み合わせは土地の有効利用を進め、経営を安定させることになった。

このAB型営農方式によって、定着を確立した。播種、収穫には多くの労働力を必要とするが、耕土にはもっぱら馬力が用いられている。しかし、1950年代にはいと、トラクターの導入が始まり、比較的土壌経営規模の大きい上層

第1表 「ミネのムラ」構成員の土地所有・経営規模と
農業経営類型（1960年）（筆者の資料による）

世帯番号	所有農地面積 (単位： アルケイレ)	農業経営類型	トラクターの 有無 (○有 ×無)	同左購入年
37	37.00	AB	○	1954年
30	36.00	AA	○	1942年
35	25.00	AA	○	1957年
08	21.25	AB	○	1953年
29	17.50	AB	○	1957年
01	(14.00)	a b	×	
09	12.00	AB	○	1957年
22	12.00	AB	○	1952年
05	11.50	AB	×	
06	11.50	AB	○	1956年
17	11.50	AB	○	1958年
33	11.50	AB	トラック所有	
23	10.00	AB	○	?
40	10.00	AB	×	
26	9.80	AB	×	
03	9.00	AA	×	
11	9.00	AB	○	1945年
15	9.00	AB	×	
25	9.00	AB	×	
02	8.00	AB	×	
32	(8.00)	a b	○	1958年
34	8.00	養 鶏	○	?
04	7.50	AB	×	
16	7.00	?	?	
28	7.00	商 業	×	
31	7.00	AB	○	1955年
19	6.00	AB	×	
18	5.00	AB	トラック所有	
20	5.00	AB	×	
21	(5.00)	a b	×	
38	5.00	AB	×	
36	4.00	AB	○	?
12	3.50	AB	×	
14	3.00	AB	○	?
27	3.00	AB	×	
07	0.00	?	?	
10	0.00	?	?	
13	0.00	?	?	
39	0.00	教 員	×	

註1：41, 42, 43, 44番はリストにあるが、インタビューができなかった。

註2：農業経営類型記号

AA=綿+アモンドイン（落花生）の自作農

AB=アモンドイン（落花生）+パタータ（じゃがいも）の自作農

a b=アモンドイン（落花生）+パタータ（じゃがいも）の借地農

註3：農地面積で（ ）は、借地。

部には、馬力からトラクターへの切り替えが行われ始めている。トラクターの導入は経営規模の拡大を促すので、近い将来、経済階層の分化が進行することが予想される。

- 1) Milliet, Sergio : Roteiro do café, 1946, São Paulo, pp. 75-77.
西川, 前出, 1990年, 53ページ。
- 2) Barraclough, Solon : Agrarian Structure in Latin America, 1973, p. 94.
西川, 同上, 53ページ。

Ⅲ. 「Y 日記」から見た日系農業小生産者の生産と生活の様態

(1) Y 氏の生活史

「Y 日記」の記録者 Y 氏は、1911年（明治44年）、農家 Y K の長男として福岡県浮羽郡竹野村（現田主丸町竹野地区）に生まれた。1929年、18歳の時に、父 Y K, 母 Y M に伴われて、兄弟 2 人、姉妹 2 人と共にブラジルに渡った。

竹野部落は、もとは隣の麦生（むぎお）部落の分村であったという。現在とともに、田主丸町竹野地区になっている。麦生に行くと、道の右の家はアメリカ、左はカナダ、その隣はブラジルといった具合で、部落の3分の1は海外移民関係者であるというほど、海外渡航者の多い村である。戦前はブラジルが多かったという。Y の姓を持つ者は、麦生には、54—55軒もあり、竹野にも数軒ある。

集落は、水繩（みのう）（土地では耳納と書く）連山の北斜面の山麓に沿って並んでいる。その前面には、筑後川中流部の広い沖積平野に水田が広がる。筑後川本流との間には支流の巨瀬川が流れ、それに沿った田主丸の中心集落は、江戸期以降筑後川中流部の水運の要地で、農林産物の流通の結節点としての商都であった。1915年（大正4年）久留米一日田間に筑後軌道（現九大線の一部）が完成し、1929年（昭和4年）には筑後軌道バスが開通している。竹野、麦生の集落は、山麓の高みに立地しているが、耕地は筑後川の氾濫原に広がり、しばしば洪水、水害に襲われている¹⁾。この土地に伝わる河童伝説が多いのは、このような風土に由来しているとも言われる²⁾。町の年表を繰ると、明治以降だけでも、1888年（明治21年）、1915年（大正4年）、1953年（昭和28年）の大風水害が記録されている³⁾。

麦生の Y M 氏の話によると、「この部落では、分家の習慣があった」という。「しかし、資力が足りなかつたので移民をした」とのことである。Y M 氏の「母の従兄弟に当たる鳥越虎次郎がブラジルに笠戸丸移民としてブラジルに渡

り、叔父の稲吉勝次郎と Y T とがその後続いた」。鳥越虎次郎の名は、1908年（明治41年）の第1回ブラジル移民船笠戸丸の移民名簿にはなく、1910年（明治43年）の第2回ブラジル移民船旅順丸の移民の中に福岡県出身の古野勝次郎の名がある。しかし、その正誤を問う必要はないだろう。YM氏の弟も、1935年（昭和10年）にコロノ移民としてブラジルに渡っていて、その一家と子孫は、現在ブラジルに在住している。そして、そのことが、農家の分家の習慣と関わっていることがYM氏によって確かめられた。

Y氏は、両親と兄弟姉妹ともども、渡伯後すぐに、パウリスタ線ピラチニンガ Piratininga に近い、ブラジル人所有のヴィアード耕地 Fazenda Viadoに、コーヒーの樹の監理をする一年契約のコロノとして入植した。このヴィアード耕地は、1910年の第2回日本移民（旅順丸移民）で、福岡県出身者12家族44人が集団的にコロノとして入植した耕地である⁴⁾。この耕地に入植したのは、出身村の人間関係によったものと推察できる。労働力は、親2人、男子3人、女子3人で、6,000本の樹の監理を請け負った。当時、1俵の生産者価格は60ミルレイスであったが、収穫賃は、1929年には1俵4ミルレイス、1930年には5ミルレイスであった。

1930年、奥ソロカバナ線のマルチノポリス Martinópolis に新しく土地を購入した日本人の知人 I T の耕地に移り、4年契約のコーヒーのフォルマドールとして契約、入植した。契約は、コーヒーの樹1本を植え付けて仕立てることに対して、0.9ミルレイスの仕立て賃を受け取ることとして、4,000本のコーヒーの樹を請け負った。それ以外に、樹と樹との間の空閑地に作付けをする権利—間作権 *complanta*—を得て、フェイジョン、ミーリョ（とうもろこし）を1列当たり2〜3筋播き、その収穫も収入となった。

契約を終え、1933年に日本人 K K のコーヒー耕地に2年間勤めたが、コーヒーの価格は1俵9ミルにまで下っていた。それに対して、フェイジョンは1袋3.5ミルであった。

コーヒー耕地の労働に見切りをつけ、1935年に、同じ奥ソロカバナ線プレジデンア・ブルデンテ市の南のアンヌマス Anhumas の街から7kmのところの耕地を購入し、入植した。この耕地は、コーヒー園15アルケイレ、パスト（牧地）3アルケイレ、その他2アルケイレ、総計20アルケイレ（約48ヘクタール）で、その購入価格は総計5コント（5,000ミルレイス）であった。コーヒー園には、13,000本の4年もののコーヒーの樹が植わっていたが、霜でやられて枯れかけていた。

この頃、コーヒーの価格が悪く、綿がもっとも良い時であったので、主作は綿花とし、綿を8アルケイレずつ12年間連作し続けた。その結果、土地が瘦せた。

第二次世界大戦の勃発でハッカの価格が暴騰し、ハッカ景気が始まった。Yも1942年からハッカの栽培に手をつけ、1943年には自己資金でハッカの蒸留装置まで設備した。その費用は約8コントかかっている⁶⁾。ハッカの価格は、低い時で1キロ当たり250ミルレイス、高い時で400ミルレイスになった。ハッカの生産量はアルケイレ当たり200kgであったから、アルケイレ当たりの粗収入は、50—80コントにもなった。ハッカの生産に対しては、ブラジル銀行 Banco do Brasil がアルケイレ当たり7コントの融資をしたことも、ハッカ景気を煽ることになった。しかし、3年目の1944年に、価格は1キロ当たり80ミルレイスにまで大暴落した。如何に投機性が強いものかは、この時に分かったが、サンパウロの農業者は、儲けることには敏感であった。銀行から借金をして大規模にやっていた者には、借金を残して困った者が多かったが、Yは、自己資金で賄えるほどの規模でやっていたので、打撃は少なかった。

アニューマスの土地が綿の連作でやせたため、新しい土地を求めて、Y氏は1947年に、弟のYTは1948年に、この土地「ミネのムラ」にやってきた。1949年にアニューマスの耕地が1アルケイレ当たり4コント、総計50コントで売れたので、また、買い手のブラジル人がその土地をバストにしたので、牛は別売り、「ミネのムラ」で、スペイン人から土地9アルケイレ余を総計95コントで購入した。これが現在の土地である。2年目まで綿を栽培したが、3年目から綿をやめて、バタータ（じゃがいも）とアモンドイン（落花生）を主作物とし、それに少々の飼料用のとうもろこしとバストを組み合わせた経営を始め、ここに定着した。

こうして、1960年現在、Y氏は、「ミネのムラ」で経営規模から見ると中位に属し、経営形態から見ると平均的な農業経営者になった⁶⁾。（第1表）そして両親は、隠居し、Y氏が世帯主となり、家族は、両親とY氏夫婦、1941年生まれの長女、1942年生まれの長男、1943年生まれの次女、1946年生まれの次男によって構成されている。

- 1) ここまでのことは、町における聞き取りと『田主丸・1989年町勢要覧』および『増補版田主丸中心の歴史年表』田主丸町、田主丸町郷土会、昭和53年による。『増補版田主丸中心の歴史年表』田主丸町、田主丸町郷土会、昭和53年2月1日。
- 2) この地方の河童伝説については、田主丸町郷土会に河童研究会が作られているほどである。その中の説の一部を引こう。「筑後地方の河童伝承はやはり、筑後川に

起因するものと思われる。筑後川は別名、一夜川とも言って、一夜にしてその流れが変わる程のあばれ川である。その大洪水の脅威から免れんと水神信仰が生まれ、それが、いつしか降雨をも願う水神ともつながり、水田耕作との密接なる関係へと発展しながら、その時代に依って水神への信仰も深まり変化していった」藤田正登「河童シリーズ5」『田主丸町郷土会会報』8号, 1990年, 5月31日。

- 3) 前出『増補版田主丸中心の歴史年表』
- 4) 香山六郎『移民四十年史』1949年, サンパウロ, 60-61ページ。
- 5) 『日記帳・第一冊』の記録によれば,

昭和拾八年五月

葉加釜購入	一, 金三コント五百ミル	釜代	森氏ヨリ支払
	一, 金貳コント八百ミル	桶代	稲毛支払
	一, 金五百ミル	釜修繕費	支払
	一, 金五百ミル	高山自動車	運送費
	一, 金四拾ミル	セメント	貳俵支払
	一, 金拾五ミル	石灰	壹俵払
	一, 金八拾ミル	煉瓦	壹千枚払
	一, 金百貳拾ミル	レゼンテヨリアニユマス迄	煉瓦カロナ
		運送費	
	一, 金三拾ミル	アニユマスヨリ内迄	高山自動車
	一, 金百ミル	針	八個代支払
	一, 金貳百ミル	板	五トヲゼ手付金払い
	一, 金五拾ミル	高山ベルナルデス	食料代払

とある。この総計は7コント935ミルレイスである。

- 6) 第1表中の世帯番号25のものである。

(2) 「Y日記」の小さな解説

「Y日記」(以下、Y日記または日記とだけ記することがある)は、多面的な内容を含んでいる。その中から日系農業小生産者(ベケーナ・プロプリエダージ)の生産と生活の様態を読み取るにあたって、幾分の解説を加える必要があろう。

日記は、変形A5版のハードカバーのノート4冊からなる。

第1冊(68ページ)は、『昭和拾貳年四月降次 日記帳』

第2冊(184ページ)は、『昭和貳拾年拾月ヨリ降次 日記帳』

第3冊(184ページ)は、『昭和廿五年一月ヨリ降次 出入日記帳』

第4冊(184ページ)は、『昭和二十五年一月降次 収入日記帖』

と、各々表紙に縦に漢字で墨書されている。第1冊は、厚さも薄く、記録も心覚え的に断片的であるが、第2冊の第1ページ目には、

「千里乃道も一歩よ里進む」

と墨書され、内容も充実し、この記録を実行することに並々ならぬ気構えが窺われる。

内容は、日記というには日常的な事件や感想についての記録は極めて少なく、収入の部分は断片的で、ほとんどが家計の大福帳的な支出簿である。第3冊に『昭和廿五年一月ヨリ降次出入日記帳』、第4冊に『昭和二十五年一月降次収入日記帖』と表示し、この2冊は出入日記帳と収入日記帖とに区別する意図があったようであるが、結果的には、第3冊目は昭和25年1月から昭和28年7月までの支出記録となり、第4冊目は、初めにわずかに収入記録的なものがあるが、大部分は昭和28年8月から昭和30年12月までの支出記録となっている。

従って、この記録をもとにして、農業経営の収支を知ることはできないが、農業経営支出を含めた家計支出の傾向や、家計支出から見た生活の様態を捉えることはできるという点で貴重な資料である。「ミネのムラ」ばかりでなく、農業小商品生産者とインタビューしていると、しばしば、カマラーダ（日雇い農業労働者）を雇うと、心覚えのためにも、また経営収支を知るためにも、どうしても労働とそれに見合う賃金を算定し記録する必要に迫られるという話をよく聞いた。従って、たとえ断片的であっても、このような記録は、農業小商品生産者の手元には残されているはずである。このY日記も、第1冊目は、そのような断片的記録に終わっている。しかし、第2冊目からは、Y氏の並々ならぬ気構えによって、より充実したものとなっている。このような一般的状況を考えると、この日記の分析は、農業小商品生産者の農業経営と家計の特性を捉える資料として、より一般化できるのではないだろうか。

(3) 「Y日記」記入費目の吟味

「Y日記」の記入費目を整理、吟味しているうちに、こんなことを考えた。大変極端な言い方かもしれないが、文字を持つ民族は、特に文字を知っている個人は、記録を残すことによって形式合理的な行動様式を持つ可能性を強く持っているということである。

日記の初めのほうは、農業資材やカマラーダに対する賃金の断片的な心覚え的なメモに近いものであったが、昭和20年以降は、それにとどまらないで、日記風に、支出を逐一順次に記入する形をとり出している。したがって、あらゆる支出費目を記録しなければならない。

それを比較的やりやすくする条件は、ブラジル社会の中にもある。ブラジル

の商店では、当時から販売税にからむ税制によって、販売記録が義務づけられていた。それに加えて、小商店でも、一人でも店員を使用する場合は、販売と金銭の授受に手落ちが起らないように、客に品物を販売する時には、次のような手続きをとる。客が品物を選ぶ。店員はそれを前もって用意された複写紙付きの伝票に、費目、数量、価格、売上金の合計を記入し、客に渡す。客は、その伝票を持って出納係（店主の場合もある）のところに持って行って、金を支払い、伝票のコピーや半券を受け取る。品物は、店員によって準備され、客は、半券を示すことによって、はじめて品物を受け取ることができる。したがって、客は、容易に買い入れた品物の明細が書かれた伝票を受け取ることができる。（第1図）この伝票を保存しておけば、家計簿に記入する際に役立つというわけである。

しかし、この伝票は、もちろんブラジル語（ポルトガル語）で書かれている。家計簿にそのまま記入できれば、それにこしたことはない。しかし、日本

CASA NIPO Venda ao Consumidor
Do
Kiyoishi Inoue
 Secos e Molhados · Miudezas em geral
 Leterias, Conservas, Bebidas, Ferragens
 Av. Coronel Marcondes, 618 Cx. Postal, 24
 Telefone, 427 - PRUDENTE - PARANÁ
 L. F. 20221/60

1677

P. Prudente, _____ de 1949

Ilmo. Snr. _____

1.ª Via

4 Macaroni	38,00
1 Lampião	78,00
1 Amarelo	10,00
1 Condimento	22,00
152,00	

NÃO VALE COMO RECIBO

Tipogr. Comercial Brasileira R. 2.823 - R. N. Santos Prado, 600 - P. Prudente - Da 1 a 8.000 - Caixa 9-1044

第1図 プルデンテ市のある日系商店の受取伝票

解説：内容は、マカロニ 4個 38.00、ランプ 1個 78.00、アイスクリーム 1個 10.00、調味料 1個 22.00、計152.00。
 (正式の)領収書としての効力はないと注記してある。

では小学校卒であり、ブラジルに渡ってからブラジルの学校教育を受けているわけでない者にとっては、記録をブラジル語で行うことは容易なことではない。そこで、「文字栄ゆる国」日本での教育の成果が現れる。人や物の名前も日本に関わりのある事項については、もちろん漢字仮名混じりの日本語で記録するとしても、ブラジル名の固有名詞や事項となると、そうはいかない。しかし、日本文字には、表音文字としてのカタ仮名やひら仮名書きがあり、また、漢字を表音文字化して、外国語を記録するという知恵を働かすことができる。そこが、文字を持つ民族の特徴といえよう。この日記は、まさにその手法によって書かれている。

しかし、ブラジル語名は耳から聞いたものによることが多く、したがって、その記録は、必ずしも正確とはいえないものがあり、そのこともあって、費目の分類に際して、分類不明にせざるをえなかったものができてしまった。そのことを含め、また、どのように日本文字への書換えが行われているかを示すために、特徴的な費目の記録を表にした。これは、文化的同化過程の資料ともなるであろう。(第2表)

第2表 Y日記に見られる費目表記

1) 日本語の漢字仮名まじり表記

費目表記名	解	説	註
ガシメン	脱脂綿(だっしめん)		薬
コーヤク	膏薬		薬
パンソヲコ	絆創膏(ばんそうこう)		薬
わかもと	わかもと・日本の保健薬		薬
奇応丸	奇応丸(きおうがん)		薬
救心(丸)	救心(きゅうしん) 日本の心臓病の薬		薬
灸	灸(きゅう)		薬
中将湯	中将湯(ちゅうじょうとう)		薬
薬	薬(くすり)		薬
六神丸	六神丸(ろくしんがん)		薬
カセイソヲダ	か性ソーダ		農
ノミ	鹽(のみ)		農
ハンダナマリ	ハンダ用ナマリ		農
蝶ツガイ	蝶番(ちょうつがい)		農
釘	釘(くぎ)		農
葉加/ハッカ	はっか	hortelã	農

(つづき)

費目表名記	解 説	註
硫酸銅	硫酸銅(昭和25年ころから使用し出す)	農
叭	叭(かます) saco	農
カフェイリ	コーヒー煎り器	日
こうもり傘	こうもり傘	日
センメンキ	洗面器(せんめんき)	日
そめこ	染め粉	日
バケツ	バケツ	日
ホヤ	ランプの火屋(ほや)	日
ミシンシンガー	ミシン	日
瓦ラス	ガラス vidro	日
瓦斯のホヤ/ランボのホヤ	石油ランプの火屋(ほや)	日
瓦斯リナ	ガソリンの擬似語, 実は灯火用石油	日
線粉/御千香	線香(せんこう)	日
燐寸	マッチ fósforo	日
蠟燭代/ロソク	蠟燭代(ろうそくだい)/ろうそく	日
アサクサノリ	浅草海苔(あさくさのり)	食
アズキ	小豆(あずき)	食
アツダシ魚/アチダシ/イリコ	だし魚	食
魚弱/弱魚	いわし, 干いわし sardinha secada	食
ウドン	うどん	食
カマボコ	蒲鉾(かまぼこ)	食
カンピョウ/かんびょう	乾瓢(かんびょう)	食
カンビフ	コンビーフ	食
キビナゴ/イワシブシ	だし魚	食
コブ	昆布(こんぶ)	食
スルメ	錫(するめ)	食
センベイ	煎餅(せんべい)	食
ソオダ	ソーダ水	食
ソバ/そば	蕎麦(そば)	食
ナシ	梨(なし)	食
ビール	ビール	食
フヤス粉/フヤシ粉	ふくらし粉	食
マンジュ	饅頭(まんじゅう)	食
モチ	餅(もち)	食
ユバ/ゆば	湯葉(ゆば)	食

(つづき)

費目表記名	解	説	註
煙草子	煙草(たばこ)	cigarro	食
煙草子コリダ	細煙草(なわたばこ)	corda	食
混弱/こんにゃく	混弱(こんにゃく)		食
醬油	醬油(しょうゆ)	molho de soja	食
醬油元	醬油(しょうゆ)	molhe de soja	食
酢/ス	酢(す)	vinagre	食
赤粉	?		食
素麵	素麵(そうめん)		食
味の元/アヂノモト	味の素(あじのもと)		食
蜜柑トハトゼ	蜜柑(みかん)		食
餅米	餅米(もちごめ)		食
カケ払い	掛け払い		他
カンジン元	勧進元(かんじんもと)		他
ダース	ダース		他
ミヤゲ	土産(みやげ)		他
印紙代	印紙代(いんしだい)	selo de imposto	他
観世音	観世音(かんぜおん)		他
御香典	御香典(おこうでん)		他
御祝儀	御祝儀(ごしゅうぎ)		他

2) ポルトガル語のカナ表記

費目表記名	ポルトガル語表記	解	説	註
カルビズマ	Carbizuma	カルビズマ=胃腸薬の名前		薬
フィガビトリイ/ガビトリ	Figavitorio	フィガヴィトリオ?=肝臓の薬		薬
アグハウキシユリ	agua oxido	アグアオキシード=オキシフル		薬
アルコラル	alcool	アルコオール=アルコール		薬
アスピリーナ	aspirina	アスピリーナ=アスピリン		薬
カリシム/カリシューム	cálcio	カルシオ=カルシウム		薬
ドトル	doutour	ドートル=医者		薬
ガアーゼ	gaze	ガーゼ=紗(しゃ)		薬
ラシム	radio	ラディオ=ラジューウム光線		薬
ビタミン	vitamina	ヴィタミーナ=ビタミン剤		薬
シャラッペ/チョラブ	xarope	シャロッペ=シロップ, 水薬		薬
アセニャトシンボ	Acenhatoximbó	農薬の一種(昭和21年から)		農

(つづき)

費目表記名	ポルトガル語表記	解 説	註
ベノニックス/ベレノクス	Benonix	農薬の一種 (昭和25年から)	農
フルミシーダ	?	農薬の一種	農
ブエナート/ブエナアテ	Buenate	アメンドイン殺虫薬の一種	農
ハメヤ	a meia	ア・メイア=折半歩合	農
アバカテ/アバカアテ	abacate	アバカテ=果物の一種	農
ランビキ	alambique	アランビッキ=蒸溜器	農
アルハシャ	alface	アルファッセ=レタス	農
アルゴドン	algodão	アルゴドン=綿花	農
アーユウ/アーヨ	alho	アーリョ=にんにく	農
ラアカセイ/メンドイン	amendoim	アメンドイン=落花生	農
メンドインバテ	amendoim batida	落花生の殻落とし	農
アラド先/荒道先	arado	アラード=鋤	農
アロバ	arroba	アローバ=単位約 25 kg	農
アロエス	arroz	アロス=米	農
アシデンテ	assistente	アシステンチ=助手	農
パタチーニャ	batatinha	パタチーニャ=馬鈴薯の種薯	農
カイシャ	caixa	カイシャ=箱	農
カマラーダ	camarada	カマラーダ=日雇い農業労働者	農
カミヨン	caminhão	カミニオン=トラック	農
カルピナ	capina	カピナ=除草	農
カルトリユ/カルト領	cartorio	カルトリオ=土地投機所	農
セボラ	cebola	セボーラ=たまねぎ	農
コラルダ/コルダ	corda	コルダ=縄/縄煙草	農
エンセラト	encerrador	エンセラドール=囲い煉瓦	農
エンシャード	enxada	エンシャード=鍬(くわ)	農
エンシャドン	enxadao	エンシャドン=大型鍬	農
ファッカ	faca	ナイフ, 山刀	農
フェジャン豆	feijão	フェイジョン=フェイジョン豆	農
ガラリナ/ガリーニャ	galinha	ガリーニャ=若鶏	農
ジャポチカバ	jabuticaba	ジャブチカーバ=果物の一種	農
ジャッカ/ジャアカ	jaca	ジャカ=果物の一種	農
ラランジャ	laranja	ラランジャ=オレンジ蜜柑	農
リイマ	lima	リマ蜜柑, 甘いレモン	農
マシャード/まさかり	machado	マシャード=斧	農
マルテイロ	martelo	マルテーロ=金鎚(かなづち)	農

(つづき)

費目表記名	ポルトガル語表記	解 説	註
パンヤトリ／パンヤ賃	paina	パイーナ＝綿(わた), 綿摘み賃	農
サアグ	saco	サッコ＝袋	農
セーメン	sēmen	種子(たね)	農
トマテ	tomate	トマーテ＝トマト	農
トン場(道具)／トンバ先	tomba	トンバ＝土起こし／鋤(すき)	農
ヴァッタ／ワタ	Huata	ワッタ(地名)	地
マンダワリ	Mandaguari	マンダグアリ(地名)	地
ベンセラブ／ベンセスラス	Venceslau Bras	ベンセスラウブラス(地名)	地
アレモン	alemã	アレマン＝ドイツ系	人
バイヤーノ	baiano	バイアーノ＝バイア州生れ	人
イスパニョル	espanhol	エスパニョール＝スペイン系	人
黒ジョーン	negro João	黒人のジョアン(労働者の名)	人
シリヤーコ	siriaco	シリアッコ＝シリア人	人
アズマキリン	Azumaquirin	アズマキリン＝伯國産日本酒	食
シタル	Citar	シタル＝紙巻煙草の銘柄	食
リオグランデ	Rio Giande	リオグランデ米	食
アルモッソ	almoço	アルモッソ＝昼飯	食
アゼチ油／アゼイチナ油	azeite	アゼイチ＝オリーブ油	食
バカヤラ／バカヤロ魚	bacalhau	バカリャウ＝鱈(たら)	食
バラ	bala	バーラ＝弾, キャラメル	食
ボル	bola	ボーラ＝球形の菓子	食
ボトン	botão	ボトン＝ボタン	食
カフェ	café	カッフエ＝コーヒー	食
カステラ	castela (pão de ló)	カステラ	食
カン子セイワ／ カンネセイワ	?	食品の一種	食
セベ(ビ)リジャ／ セベル酒	cerveja	セルベージャ＝ビール	食
チョコラテ	chocolate	ショコラテ＝チョコレート	食
シンザノ	cinzano	シンザーノ＝チンザーノ酒	食
コンシャ	concha	コンシャ＝貝	食
コーベフロロ	couveflor	カリフラワー	食
ドッセ	dôce	ドッセ＝菓子	食
フルメンタ	frumento	良質の小麦	食
グアラナ／ガラナ	guarana	グアラナ＝飲料の一種	食
イギリス／チョツメ	lingüiça	リングイッサ＝腸詰め	食

(つづき)

費目表記名	ポルトガル語表記	解 説	註
マカロン	macarão	マカロン＝マカロニ	食
マンリュバ	manjuba	マンジュバ＝わかさぎ風の魚	食
マンテイガ	manteiga	マンテイガ＝バター	食
マルメエダ／マルメーダ	marmelada	マルメラダ＝果実の羊羹	食
マサン／マアサン	maçã	マサン＝林檎(りんご)	食
ミリオ粉フバ	milho fuba	ミーリオフバ＝とうもろこし粉	食
モルタンデラ	mortadela	モルタデラ＝イタリア製の腸詰	食
パルミタ／タルミッタ	palmita	パルミッタ＝椰子の若芽の食料	食
ペイシ	peixe	ペイシエ＝魚	食
ピング	pinga	ピング＝地酒のラム酒	食
ボン	pão	ボン＝パン	食
ケージュ／ケージ	queijo	ケイジョ＝チーズ	食
クラゴキゼキゼ	quizequize	キゼキゼ＝鯉の一種	食
サルジニュー／サルジニア	sardinha	サルジーニャ＝いわしの缶詰	食
セイボ	seibo	セイボ＝豚の脂	食
ソルベッタ	sorvete	ソルヴェッチ＝アイスクリーム	食
タイノマコ(ユ)	tainha の子	タイニャの子＝ボラの子	食
トモカフエ	toma café	トモカッフエ＝コーヒーを飲む	食
ウバドゼ	uva doce	ウヴァドッセ＝ぶどう菓子	食
ビンユ	vinho	ヴィーニョ＝ぶどう酒	食
トモベ／トモブレ	automóvel	アウトモヴェル＝自動車	交
カレト	carreta	カレッタ＝小車	交
カアロ賃	carro	カアロ＝車, 自動車	交
カロッサ	carroça	カロッサ＝馬車	交
シャレエータ／車列タ	chareta	シャレッタ＝乗合馬車	交
イデボリタ	ida e volta	イーダイヴォルタ＝往復運賃	交
ジャネイロ／ジャネロ	jardineiro	ジャルジネイロ／近郊バス	交
ラニブス	ônibus	オニブス＝乗合バス	交
ポント	ponto	ポント＝点, バスの停留所	交
バンデリア?	bandalho?	バンダリーヨ＝ぼろ, ござ	日
バルバンテ	barbante	バルバンテ＝撚り糸	日
カデンノ	caderno	カデルノ＝帳面, ノート	日
カミザ	camisa	カミーザ＝シャツ	日
カズリナ袋	casulo	カス(まゆ)＝ランプの火袋	日
カテンノカラスペンサキ	?	文房具の一種	日

(つづき)

費目表記名	ポルトガル語表記	解説	註
シнта	cinta	帯, ベルト	日
ガランボ/ガランビョ	garrafa	ガラッファ=瓶(びん)	日
ガラホン	garrafão	ガラフォン=大きな瓶(びん)	日
石ケロ石	isqueiro	イスケイロ=ライター	日
ランボ	lampa	ランバ=ランプ	日
ラッタ	lata	ラッタ=ブリキ缶	日
メイヤ	meia	メイア=靴下(くつした)	日
パンノ切れ	pano	バーノ=布切地	日
ベトロ	petroleo	ベトロレオ=石油	日
タマンコ	tamanco	タマンコ=サンダル	日
チンタ	tinta	チンタ=ペンキ染料, インク	日
トアリャ	toalha	トアリャ=タオル	日
パール	bar	パール=立ち飲みの飲食店	他
ビショ/バイショ	bicho	ビッショ=簡易宝くじ	他
シネマ	cinema	シネマ=映画	他
シリコ/チリ子	circo	シルコ=サーカス	他
イントラダ	entrada	エントラーダ=入場券	他
エスタード学校	escola estadual	州立学校	他
インポスト, インポスト	imposto	インポスト=税金	他
マルカアテ?	marcate	マスカッテのことか?	他
マスカッテ	mascate	マスカッテ=小間物の行商人	他
メヤキロ	meio kilo	半キログラム	他
ムダンサ賃	mudança	ムダンサ=引越し	他
ベンソン	pensão	ベンソン=下宿	他
リイハ	rifa	リッファ=籤(くじ)	他
ビヤジ	viagem	ヴィアーゼン=旅行	他

3) 内容不明のもの

アバテ, アルセニイコ, カザベラ, キセラボ, クラドリ, クレゴ, コヤリ, ゴキバト
ヲサイ, サクリンボ, シンボリユミント, スビタ?, スルウーバ, スロアン, タッフ
ルミンダ, タベユマアーチ, チョドロ自動車賃, チリト袋, チンツラデオート, チンツ
ラデオート, ビシリナ, ベラボ, ベラシン, ボリノ, ボリ先, ヲラシーユ。

註: 薬=医療, 薬品関係。農=農業生産の関係。地=地名(プレジデンテ・ブルデン
テ, サンパウロのように表記が正確で, 頻繁に現れるものは除いた)。人=人の
呼称。食=食品等。日=日用品。交=交通関係。他=その他。1) には, もっぱ
ら, 日本名の固有名詞か, ポルトガル語で呼びにくいものが含まれている。

(4) 「Y日記」分析のための費目の分類

まず、農家経営の特性の一部を知るためにも、また農家の生活の様態を知るためにも、日記の中の家計簿の内容に注目し、大福帳的に書かれた費目を、大きく農業生産に関わる費目と、家計費つまり生活に関わる費目とに分類し、さらに以下のように細分類し、それをパソコンにインプットして、分類、整理を完成した。

農業生産に関わる支出費目の分類は、次のとおりである。

貸金支出（多くはカマラーダの貸金）

生産材購入費（農具・肥料・農薬・種子・農産物等の運搬費）

土地購入費（土地購入費、地代、土地登記費用等）

生活に関わる支出費目の分類は、次のとおりである。

食料費（食料一般・菓子）

煙草

衣服費（衣服・生地・洗濯費等）

日用品（靴・糸・燐寸・家庭用具・風呂資材・石鹼等）

住居費（家屋修繕・購入等）

光熱費（石油等燃料・ランプ等）

保健衛生費（医療費・薬品・灸・按摩・理髪等）

教育費（学費・授業料・講演会・講習会費用等）

書籍および雑誌代（書籍・雑誌・新聞代等）

交通費（自動車賃・汽車賃・シャレット等馬車代・郵便費等）

娯楽費（個人の娯楽・映画・釣・サーカス見物等）

交際費（見舞・家の交際の土産・餞別等）

寄付（日本人会会費・寺・学校寄付金・日本送金等）

旅費（遠距離長期間の旅行・宿泊費等）

祝儀（結婚費用・見合い費等）

法事等（正月・盆の墓参り等）

その他（分類不能・不明）

この費目分類に含まれないものには、租税（土地税・道路税）、貸出金、借入れ金がある。

上記の分類は、日本の家計簿の分類とも異なり、家政学的にも正しいとは思えないが、筆者としては、農業経営と生活様式の動向を捉えられるように配慮したつもりである。

各費目を各分類に当てはめること自体が、文化の問題をはらんでいて、戸惑うことが多かった。例えば、相撲、野球、映画、運動会などの見物は、この社会においては主要な娯楽であるから、娯楽費に分類するのは当然であると思えるが、しかし、相撲で出す花代は仲間の交際費的性格が強し、野球も青年会主催のものに参加するとすると、交際費的性格を持つ。明らかに日本人会と青年会主催の運動会や学校への寄付と分かるものは寄付とした。しかし、日本人会と青年会主催の弁論大会や運動会への参加は一部交際費に繰り込んだ。ピンガ（地酒）や煙草は、カマラーダへの現物給与でもあり、資金的性格を持つものがある。しかし、ピンガは食料費に繰り込み、煙草は独立費目にした。

ものによっては、購入した店の名前で一括記入されている場合がある。このような店は、17軒ほどあるが、仔細に読み取っていくと、購入品によって、店が分類できることが分かった。このことから逆に、プレジデnte・プルデnte市ほどの都市になると、商店の専門化が進んでいることが判明した。しかし、ブラジルの地方の町でよく見られる、食品、煙草、雑貨などを売る雑貨屋的な商店（セッコイモリャード *secos e molhados*）もあって、幾分の誤差を生ずる。全く不明のもの3軒は、その他の不明とした。17軒中、名前から明らかに日系商店と思えるものは16軒で、そのうち菓子・煙草を購入する店は3軒、一般食料、塩、調味料を購入する店が3軒、雑貨屋的な店が1軒、食料、特に魚類を購入する店が1軒、米など穀物を取り扱う店が2軒、農薬を購入する店が1軒、薬局が1軒、衣料品、着物、生地を取り扱う店が2軒である。衣料品店の一つが、非日系の店である。雑貨屋的な店は、集団地の近くの国道沿いがあり、他はすべてプレジデnte・プルデnte市にある。

米、穀物類、一般食料品の購入には、一部かけ売りが行われていることも分かる。

（以下次号）

本報告を作成するにあたって、1989年度および1990年度法政大学特別研究助成金を用いた。